



以上挙げた作品に対して、これまでも日本の研究者によって多少の先行研究がすでになされていましたが、問題点も少なくなかったようです。それで、今回は田上繁先生のご指導のもとで、神奈川大学図書館をはじめ、早稲田大学図書館、東京博物館、京都博物館、奈良博物館、日文研図書館などで墨跡の関係資料を調査して、もとの墨跡と十分に照合して、多くの基本資料を手に入れました。今後は、これらの資料をもとに、一つ一つ丁寧に照合しながら、文字の解説をはじめ、文意の分析を通して、資料価値を研究しようと思っています。

今回のチャンスを利用して、中島三千男先生、鈴木陽一先生、馬興国先生など先生方との懇談もでき、斬新な研究テーマも続々出てきました。自分の研究の一里塚とも言える研生活でした。

来日中、彦坂綾さんをはじめ、センターの事務室の方々に何から何まで手配をしていただき、本当に助かりました。どうもありがとうございます。宿舎の白楽寮も研究室ととても近くて、歩いて行けます。

最後に、留学生の姚琮さんにお礼を申し上げます。色々とお手伝いいただきどうもありがとうございました。

アントニン・レーモンドによる 戦前の住宅設計

— 東西文化統合の一例

Yola Gloaguen

(フランス国立高等研究所)



2014年10月9日から29日にかけて、神奈川大学の非文字資料研究センターに訪問研究員として滞在した。専門は日本の近代建築なのでホスト研究室は建築学科の内田青蔵研究室であった。その研究室には同じ専門の教員やスタッフ、学生たちが在籍し、さらに本研究にとって重要な資料が揃っていたことから、人間的にも研究に専念する上でも非常に良い滞在となった。

研究テーマ

本研究テーマはアントニン・レーモンドの戦前の住宅設計に関係するものである。この研究は博士論文として、本年(2014)末に提出する予定である。

アントニン・レーモンドは1888年にチェコに生まれた建築家で、22歳のときにアメリカに移住し、建築家として活動をはじめ、1916年(28歳のとき)にアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトと出会った。妻ノエミのコネクションで、ライトのアトリエであり住宅でもあったタリアセンで働くことになった。そして彼はライトに師事しながら、主に住宅建築にかかわり、ライトが情熱を傾けた日本美術にも魅了されていった。

1919年の正月、ライトに付き添って初めて来日した。1914年から設計が始まった帝国ホテルの基礎工事が進んでいるときであった。レーモンドは約一年間ライトの下で帝国ホテルの仕事をしていて、ライトとの関係が徐々に悪くなり、独立した。



レーモンドは来日以降、東京ゴルフ倶楽部や東京テニス倶楽部で、エリートが集まるコミュニティと交際を続けていたため、良い施主に巡り会うことができた。多くの

施主と出会った結果、さまざまな建築を設計する機会を得た。例えば、教会、オフィスビル、工場、大使館、住宅などである。本研究はその中で住宅にフォーカスしている。日本で活躍した外国人建築家レーモンドの創作過程における東西の文化の統合を研究する上で、住宅が最も良い素材であると判断したからである。本研究では、その統合の過程をもっともよく表しているのが、1933年の軽井沢夏の家だと位置づけている。

調査訪問の目的

滞在中の研究計画は以下の三点である。

一点目は博士論文のための資料収集で、レーモンドに依頼した施主に関する調査である。レーモンドは、東西文化の統合過程において建築だけではなく、人間関係が非常に重要な要素であると促えていた。その人間関係とは、一つは、事務所にいた日本人スタッフとの関係であり、もう一つは施主との関係である。さらに私的な交流のあった芸術や文化関係の人たち、例えば民藝運動のメンバーや我楽多宗というグループのメンバーとのものである。

二点目と三点目は将来の研究のための準備で、近代の住宅における家相の影響と民藝運動と建築の関係についての調査であった。そ



の二つのテーマはレーモンドの建築に関係のあるテーマであり、近代建築に関する研究を広げるために重要なものでもある。

そして、滞在中にもう一点調査を追加し、レーモンドの住宅作品を掲載した当時の建築雑誌の記事を収集した。『住宅』、『新建築』、『国際建築』という三つの雑誌について、網羅的に記事を収集することができた。建築の雑誌を網羅的に調べた理由は、レーモンドが活躍した戦前の日本で、日本人建築家たちが設計していた住宅建築の流れの中で、レーモンドの位置づけを分析するためである。

調査訪問の成果

一点目については、国立国会図書館の人文総合情報室に必要な情報を見つけることができた。その情報から施主の一覧表を作成して、論文の資料編に組み入れた。二

点目、三点目については、内田先生に参考文献を紹介していただいた。それらの参考文献を次の研究で活用する予定である。

四点目の建築雑誌の記事の収集については、この作業の過程で私にとって、大事な発見があった。軽井沢夏の家は、コルビュジェのエラズリス邸を一部模倣したものであることが知られている。しかし、これまではレーモンドがどうやってエラズリス邸の図面を手に入れたか、はっきりしていなかった。今回の調査で1931年11月号の『国際建築』誌に、エラズリス邸の図面が掲載されていることを確認することができた。したがって、レーモンドはこの記事によってエラズリス邸の情報を得たのであろうと推測している。これまで軽井沢夏の家については徹底的に調査をしたつもりであったが、一つだけ研究者として気がかりな点が残っていた。今回、それが解消されて嬉しく思う。

日本における現代の民間叙事の新しい発展

—神奈川県及び周辺のパワースポットを中心として—

楊 陽
(華東師範大学)



近年、都市化が進むその一方で、伝統的な民間叙事（中国語の言い方）の生きる状況は厳しい局面に直面している。世帯を単位とする農村から高層ビルが林立する町に変化し、人々は毎日忙しい生活を送り、たくさんの娯楽施設が出てきた時代に、伝統的な民間叙事は生きるスペースを失い、消失しそうな状態に陥っている。実は、民間叙事は人間生活を直に描写し、歴史を間接的に記録し、人間の自由奔放な想像として、バラエティに富んだ形式で民衆の日常生活の中に根を張り、展開している。民間文学に関する分類は、日本と中国では一致していないが、ここでは研究のため、神話、伝説と民間の故事を含める、広い範囲で民間故事を研究対象にする。

パワースポットは日本で人気が高い観光スポットとして、自然が豊か、霊験あらたかな場所とされている。これらの場所を訪ねると、自然から体にエネルギーが注がれ、自分の運もよくなると信じられている。パワースポットは大まかに分けて三種類ある。

(1) 自然風景。日本で有名な富士山や琵琶湖など、昔から神話や伝説が伝わってきた大人気の場所である。(2) 神社と寺院。日本には神社が幅広く分布し、仏教が広く伝播されているため、寺院の数も少なくない。歴史感があふれ、由緒がある神社と寺院は観光名所になっている。例えば、鎌倉の江ノ島神社、鶴岡八幡宮などである。(3) 現代の観光スポット。観覧車、スカイツリー、東京タワーのように新しい都市の文化と文明を代表し、都市或いは国のシンボルとなっている。

前二種類のパワースポットは歴史が長く、そもそもそれと関わった神話や伝説もあり、或いは発展しているうちに、自然や人の影響により、変化が起きている。第三類のパワースポットの民間叙事は、ほぼ現代人によって作られ、都市の中から生まれたものである。

筆者は神奈川県周辺の有名なパワースポット——鎌倉市の鶴岡八幡宮、江ノ島神社、東慶寺、銭洗弁財天、葛原岡神社、雷門浅草神社、スカイツリー、東京タワー——を調査して、現代の日本人がパワースポットにメンタル的な要素を求めていることを強く感じた。また、中国、日本、及び世界の国々で、民間の口承の伝統が現代において、どのように変化するかという課題について、新しい視点とフレッシュな資料を手に入れた。

以上のフィールドワークと文献資料により、結論を三点にまとめた。

①新しい叙事の生まれは、伝統の延長のみならず、現代の人々の精神的、物質的な要求と繋がっている。②経済の発展が民間信仰の習俗と関わり、観光産業を促進していると同時に、伝統叙事が伝えられ、新しい発展も起きている。③新しい時代に生まれた民間叙事は内容が現代の生活と密着し、多彩な表現力を備え、より魅力的になり、その生命力が盛んになっている。

最後に、神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センターから貴重な訪問の機会をいただき、誠にありがとうございました。勝手にわからない国とその民間文化の発展を短時間で理解することは難しかったが、